

幽波紋使いは静かに楽しむ

rainバレルーk

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは『ジョジョ』でも『黄金の精神』を持つわけでもない、ただの『オカシナ』人物が主人公である

目次

幽波紋使いは静かに楽しむ

幽波紋使いは静かに楽しむ

僕の名前は岸野齋記。きしのさいき

親しい人からは『キキ』や『キサイ』と呼ばれる。

僕は結構このアダ名を気に入ってる。

そんな僕は所謂《転生者》ってヤツだ。

そこ君？僕の頭は正常だ。だから、救急に電話しようとしている手を納めてくれよ？

そんな僕は他の転生者と同じく《特典》ってヤツを貰っている。その特典ってのは、あの有名な作品『ジヨジヨの奇妙な冒険』に出てくる『スタンド』だ。しかも『オリジナル』。

しかし、そのスタンドの素質があるかどうかを僕がわかるはずもなく、転生する前に僕はジヨジヨの奇妙な冒険に出てくるキーアイテム『矢』を『心臓』に『刺された』。そして、そのまま『渦』の中に突き落とされた……のだが……

僕は生まれてこのかた『運運悪く良く』『騒動』にも巻き込まれずにスクスクと育った。おかげで自分のスタンドの能力を調べたり、鍛える事が出来た。このまま『平退屈穩』な日常が続くと思つて『いた』。

『いた』なんて言う過去形を使うには理由がある。
今から三ヶ月前、僕はアメリカ留学から帰つて来た。

実に楽しい留学でまさに『青春』つて言うにはピッタリのモノだった。

留学先のクラスメイトと『婚約』されそうになったが……
……話を元に戻そう。

その留学から帰つて来た僕は御世話になっている大学の『教授』の部屋に向かうと……

ガチャリ

「ただいま戻りました教授——つてアレ？」

「！」ビクッ

「だ、誰？」

部屋には『黒髪』の小さな『女の子』と『アツシユ』の中学生くらいの『男の子』が行儀良く座っていた……

「……ハア……ヤレヤレだぜ……」

僕は『ジヨジヨ第3部』の主人公のように溜め息を吐いたガチャリ

「おや？君は岸野くんかい？」

すると、奥の部屋から『ボサボサ髪』に『黒淵眼鏡』、『白衣』という医者のような『男性』が出てきた。

僕はすぐさま自分のスタンド、『ザ・ラスト・グッドナイト』を出すと……

「オラアツ！」

「ぐげえツ!？」

「ええ、ええツ!？」

この『教授』の首を鷲掴みにして持ち上げた。僕のスタンドはパワーがCだが、人一人は何とか持ち上げられる。

「おいコラ、『皇^{すめらぎかなえ}鼎』教授？いつからアンタは『ロリコン』から『ペドファイリア』に進化したんだ？あ”あ”ん？」

「ぐ、苦”じいッー、誤解だ！岸野くん！」

ジタバタと教授は暴れる。

ここで話は変わるが、僕のスタンド『ザ・ラスト・グッドナイト』は『震動を作り出す』能力を持っている。

このスタンド能力がわかった時、僕は『前世』で好きだったアニメ『コードギアス』に出てくる人型機動兵器『K M F』の『紅蓮』・『月下（試作機）』に装備されていた『輻射波動機構』を思い出した。なので……

「弾けるッ！変態野郎ツ!!!」

このまま輻射熱で溶かしてやろうかと思った……のだが

「教授を離せッ！」 シャキン

「切」くんッ！」

アツシユの男の子が僕に懐から取り出した『鋏』を向けた。

僕は女の子の叫んだ男の子の『名前』に疑問符を浮かべた後、驚きとともにある『前世の記憶』が甦った。

『断裁分離のクライムエッジ』・・・？」スルリ

「え・・・ッ!？」

「がはっ」バタリ

僕は教授の首を離し、キョトンとして驚く『灰村切』と『武者小路祝』を見ながら

「ヤレヤレ・・・やっとか・・・シシシ♪」

僕は『平和』な日常が終わる時を『心』で感じた・・・

このあと、僕は騒ぎを聞きつけた教授のアシスタント、『病院坂法子』ちゃんに頬にラリアットを喰らった。奥歯にヒビが入るぐらい、キツイヤツを・・・